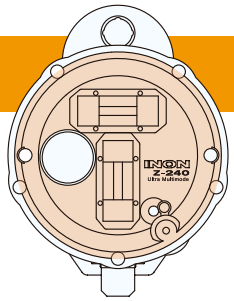


「色温度変換フィルター&拡散板」撮影テクニック ～海の色を鮮やかな青にする～

ストロボ光の色温度を、白色の5500K（ケルビン）から暖色の4900Kや4600Kに下げる「色温度変換フィルター&拡散板」。暖色の光を被写体に当てることで、様々な撮影効果が生まれます。そのなかでも、背景の海を青く鮮やかにする方法を解説します。

色温度変換フィルター[4600K]を装着したZ-240ストロボと、-0.5[4600K]拡散板 for S-2000を装着したS-2000ストロボ

色温度変換フィルター&拡散板の活用法

- 水中で人肌を健康的な色合いで表現する。
- 暖色系の被写体の発色を濃くする。
- カメラのホワイトバランスを4900Kや4600Kで撮影(RAW現像)することで、ストロボ光が当たる被写体は自然な色合いのまま、背景の海を青く鮮やかに補正する

解説&写真　多津丸

18才で初ダイビング。25才でインストラクターになり以後カメラとインストラクターライセンスを片手に世界中の海を撮影。2000年に写真家として独立。パプアニューギニアの自然と文化に魅せられて2ヶ月の長期滞在を含め現地に50回以上通う。ダイビング雑誌、カメラ雑誌、政府観光局、航空会社、ダイビング指導団体などに作品を提供。2009年には、パプアニューギニアをテーマにした写真展を東京ミッドダウン「富士フイルムフォトサロン」にて開催した。

ソフトコーラルの枝の隙間から見える海だけを簡単に青く補正できる（撮影地：静岡県、熱海）

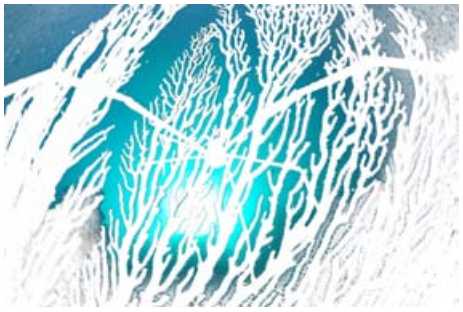
濁った海の色を普段の青色に戻す

雑誌やガイドブックなど仕事で水中撮影をする場合、ロケ期間が、その海のベストコンディションに当たるとは限りません。天気が良くなかったり、海が濁っていたり、その海の本来の青さで写真を撮れないことがあります。締め切りのある仕事では、後日改めて撮影というわけにもいきません。そこで、撮影した画像をPhotoshopなどの画像編集ソフトで補正して、普段の海の青さに戻す作業をすることがあります。

緑の海を青くするシンプルな方法としては、RAW現像でホワイトバランスを、画像が青くなる方向へ持っていくことで可能です。この場合、画像全体が青くなるため、背景の海だけではなく、主役の魚やサンゴなども青くなってしまいます。魚やサンゴは元の色のままで、背景の海だけを青くするには、色々な方法がありますが、その一つとして、切り抜くという方法があります。ソフトコーラルに色を合わせてホワイトバランスを（例えば5500K）調整してRAW現像した画像と、背景の海が青くなるようにホワイトバランスを（例えば4600K）調整してRAW現像した画像の2枚を用意します。ソフトコーラルの画像は、緑色の海を切り抜いて透明にします。背景用の画像は、ソフトコーラルを透明にして、青い海だけ残します。これら2枚の画像を重ねて、ソフトコーラルは本来の色で、背景の海だけ青い画像ができあがります。

この方法は、単純な画像であれば大した作業ではありませんが、ソフトコーラルなど複雑な形をした被写体の場合、境界をきれいに切り抜くのに、相当の手間と時間を要します。また、大きく掲載する画像の場合、切り抜いた跡が目立ってしまうこともあります。

オルトマンワラエビとソフトコーラルを残して、緑色の海を切り抜いた被写体用の画像



RAW現像時に海が青くなるようホワイトバランスを調整した、背景用の画像

ストロボの光色を変える色温度変換フィルター＆拡散板

イノンのストロボは、日中の太陽光と同じ色温度5500Kの白色光に調整されています。色温度変換フィルター＆拡散板を装着することで、若干黄色っぽい4900K、さらに黄色の強い4600Kの光に変換することができます。ストロボ光の色温度を下げることで、「水中で人肌を健康的な色合いで表現する」「暖色系の被写体の発色を濃くする」などの効果の他に、カメラのホワイトバランスを4900Kや4600KでRAW現像（撮影）することで、「ストロボ光が当たる被写体は自然な色合いのまま、背景の海を青く鮮やかに補正する」ことにも活用できます。

背景の海をより青く補正したい場合は、4600Kの方が補正の効果は大きくなります。暖色系の被写体の発色を濃くするなどの目的で、4600Kでは黄色くなりすぎる場合、4900Kの方を使うとよいでしょう。

外部オート非対応 -0.5[4900K]拡散板2

色温度変換フィルター[4900K]

外部オート非対応 -0.5[4600K]拡散板2

色温度変換フィルター[4600K]

-0.5[4900K]拡散板 for S-2000

色温度変換フィルター[4900K] for S-2000

-0.5[4600K]拡散板 for S-2000

色温度変換フィルター[4600K] for S-2000

RAW現像でホワイトバランスを拡散板の色温度に合わせる

2つの画像は、どちらもRAWデータで撮影し、パソコンの画像編集ソフトでRAW現像しています。この日は、台風の影響で海が荒れ、数日前まで青かった海が、緑に一変しました。上の画像は、ストロボの拡散板なしで撮影し、ホワイトバランス5500KでRAW現像しています。水中撮影で一般的な、デジタルカメラのホワイトバランスを[晴天]に設定してストロボ撮影するのと同じ画像が得られ、目で見たままの緑色の海がそのまま再現されています。

下の画像は、「-0.5[4600K]拡散板 for S-2000」をS-2000ストロボに装着し、RAW現像時のホワイトバランスを拡散板の色温度と同じ4600Kにしています。4600Kの黄色いストロボ光が当たっているソフトコーラルやその下の根は、ホワイトバランスの調整で青方向に補正され、5500Kの白色光を当てて撮影したのと同じ色に再現されています。一方、緑色に写っていた背景の海や左奥の根は、青く補正されています。

被写体に黄色いストロボ光をあえて当てて黄色く写し、ホワイトバランスの調整で青方向に補正して、結果、白い光が当たっている時の色に戻ります。黄色いストロボ光の影響を受けず、そのままの緑色で写っている背景は、ホワイトバランスの調整で青方向に補正されるので、緑の海が青くなるというわけです。

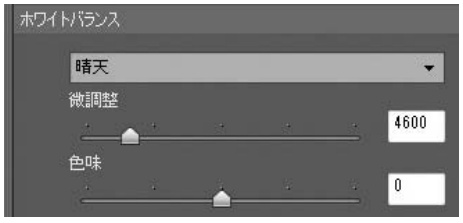
従来の方法では、フォトショップで切り抜いたり重ね合せたり、時間と技量の必要な作業をしていたのですが、イノンの「色温度変換フィルター＆拡散版」を使えば、RAW現像時にホワイトバランスを調整するだけの簡単な方法で、背景の海だけを青くすることができるのです。しかも、フォトショップなどの高額なソフトを購入しなくても、デジタルカメラに付属する無料の画像編集ソフトで十分対応できるのです。

デジタルカメラに付属のRAW現像ソフト一例

キヤノン　Digital Photo Professional
ニコン　ViewNX 2
オリンパス　OLYMPUS Viewer 2
パナソニック SILKY PIX
ソニー　Image Data Converter

拡散板なし、ホワイトバランス5500KでRAW現像。海の色が見たままの緑になっている（撮影地：静岡県、北川）

4600Kの拡散板を装着し、ホワイトバランス4600KでRAW現像。ソフトコーラルの色は変わらずに、海の色が緑から青へ補正されている



RAW現像時にホワイトバランスを4600に設定。画面はニコンのカメラに付属の「ViewNX 2」

カメラのホワイトバランス設定を拡散板の色温度に合わせる

普段JPEGだけで撮影している方にとっては、画像編集ソフトでRAW現像する方法は、敷居が高く感じるかもしれません。JPEGで撮影する場合でも、「色温度変換フィルター＆拡散板」を使って背景の海を青くする方法があります。

通常ホワイトバランスは、［オート］の他に、［晴天］［曇天］［蛍光灯］［電球］などの設定がありますが、デジタル一眼レフや高級コンパクトデジタルカメラには、数値で指定できる機能も備わっています。カメラのホワイトバランスを4600Kや4900Kに設定して撮影すれば、4600Kや4900KでRAW現像した時と同様な画像がJPEGで得られます。

4600Kの拡散板を使用したからといって、ホワイトバランスを4600Kピッタリに設定する必要はありません。好みの色に仕上げるために、ホワイトバランスを微調整することも有用です。JPEG撮影では、撮影後にホワイトバランスを微調整できないため、設定を変える場合は、カメラの液晶モニタで色を確認しながら撮影する必要があります。撮影時の手間を考えると、RAWデータで撮影して、パソコンの画面で画像を見ながらホワイトバランスを後から微調整したほうがはるかに楽でしょう。パソコンをあまり使用しない方でも、キヤノンの一眼レフEOS 60DやニコンのD7000などであれば、カメラ内でRAW現像をしてJPEG画像に変換することが可能です。カメラの機能を確認して、自分に合った撮影方法を選んでください。

カメラのホワイトバランスを4600Kに設定。画面はEOS 60D

カメラ内でRAW現像を行い、ホワイトバランスを4600Kに指定。画面はEOS 60D

コンパクトデジタルカメラでホワイトバランスを合わせる裏ワザ

コンパクトデジタルカメラの多くは、JPEG記録のみで、RAWデータ記録ができません。また、ホワイトバランスを数値で4600Kや4900Kなどに設定する機能もついていません。そのようなデジタルカメラでも、「色温度変換フィルター＆拡散版」を使って、海を青く補正することが可能です。

例えば、パナソニックのLUMIX FT4とTZ30の場合、［晴天］や［白熱灯］などのホワイトバランスを個々に微調整する機能があります。4900Kの色温度変換フィルターまたは拡散板を使用する場合は、ホワイトバランス［晴天］から右方向（青の方向）へ6目盛移動させたところが、ホワイトバランス4900Kに近いようです。また、4600Kの色温度変換フィルターまたは拡散板を使用する場合は、ホワイトバランス［晴天］から右方向（青の方向）へ9目盛移動させたところが、ホワイトバランス4600Kに近いようです。

色温度変換フィルター＆拡散板をストロボから着脱するたびに、ホワイトバランスの微調整を変更するのは手間がかかります。そこで、LUMIX TZ30のように4900Kや4600K相当にホワイトバランスを微調整した設定を、カメラの「カスタムセット」に登録できる機種であれば、モードダイヤルをC1やC2に合わせるだけで、すぐにその設定に切り換えできて便利です。

他のメーカーのコンパクトデジタルカメラでも、同様なホワイトバランス微調整の機能が付いているものがあります。ストロボの拡散板なし、ホワイトバランス［晴天］で撮影した画像と、ストロボに4900Kか4600Kの色温度変換フィルターまたは拡散板を装着して、ホワイトバランスを微調整して撮影した画像を見比べて、ストロボ光の当たっている被写体の色が同じで、背景の海が青くなっている設定を見つけ出せば、それが4900Kまたは4600K相当のホワイトバランスとなります。

ホワイトバランス［晴天］から6目盛右（青）に微調整したところが4900K相当。画面はLUMIX TZ30

ホワイトバランス［晴天］から9目盛右（青）に微調整したところが4600K相当。画面はLUMIX TZ30

カスタムセットに4900Kまたは4600K相当のホワイトバランスを登録する

温度変換フィルター[4600K]を使用した作例

【ホワイトバランス4600KにてRAW現像】

【ホワイトバランス5500KにてRAW現像】

ソフトコーラルの群生と、太陽の周りの白から青へのグラデーションが絡み合ったシーン。4600Kの色温度変換フィルターを使って、4600KでRAW現像すれば、ソフトコーラルの色はそのままで、背景の海の青さを強調できる。（撮影地：島根県、島根半島多古沖）

【ホワイトバランス4600KにてRAW現像】

【ホワイトバランス5500KにてRAW現像】

4600Kの色温度変換フィルターで海のくすみを取り除き、普段の清々しい青さで海を表現できたことで、目の前に群れる魚たちの色も際立っている。（撮影地：島根県、島根半島多古沖）

INON
有限会社イノン　〒247-0061　神奈川県鎌倉市台2-18-9　TEL 0467-48-2174　FAX 0467-48-2178
http://www.inon.co.jp

2012.09